
ナギ

karon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナギ

【Zコード】

Z5779Y

【作者名】

karon

【あらすじ】

すなどりびとに混じり、船乗りの修行をするナギ。

船乗りはいつか遠くに旅立つ。その日のために孤独な修行に耐える。

古代の海辺の村で、もしかしたらあつたかもしれない物語。

祭りの終わったその後に（前書き）

長らくおひつておいた書きかけ小説です。そういうわけで、更新は遅いでしょう。それでもいいとおっしゃってください。気の長い方大歓迎。

祭りの終わったその後

鳥の鳴き声でナギは田を覚ました。細い講師の隙間から、田差しが田を差し、まぶしに田を細めた。

藁の中から這い出して、講師を結わえた紐を解く。まだ、藁の上に寝そべるほかの子供たちもそろそろ起きだしてくるだろう。

肩にかかる黒髪を書き上げて、太陽を見上げる。

陽はさして高く上つてはいない。たゞ寝過ぎしたわけではないよつだ。

ナギの庄まつすなどりびとの里は山のやや中腹より下にある。おじじがすでに起きていた。おじじは船を降りた船乗りだ。船乗りと、すなどりびとは違う。すなどりびとは生きる限りここにいるが、船乗りは遠くに行ってしまう。帰つてくることはほとんどない。

だからここにいる船乗りはおじじだけだった。

昨日祭りが終わった。ナギがとても楽しみにしていた祭りが、どこか白々とした気持ちで、おじじの元に歩み寄った。

おじじは白いものが混じるまだらな頭を向けてナギを見た。「腹が減ったのか、なら、土の女衆のところにつけ、何かしら、もう

えるだろう

「うう」
ナギは無言で肯いた。

祭りの終わったその後に2

ナギは山をあがり、本当の中腹へ向かう。

土の女衆はどこにでもいる。そこが山であれば。土の生える植物、土に住む小さい生き物、土そのものすら土の女衆の獲物だ。文字通り、土に張り付いた女たちだった。

獲物を加工し、食べ物を調達し、またさまざまな器具を作り、この地に住まう人間の生命線とも言える女たちだった。

土鍋をかき回していた女衆が顔を上げた。

木の椀に中身を掬うと無言でナギに渡した。

「明日、貝を探りに行く」

ナギがそういうと女衆は頷いた。

日が当たるとナギの額に刻まれた三本の波線がちりぢりとつずいた。

里によって刻まれる文様は違つ。

ナギはすななりびとに招かれた日にその文様を刻めた。

それはもうナギが土の女衆にはならないことを意味していた。

土の女衆だけが、文様を持つていないので。

その日、ナギは船乗りになることを決定付けられた。

木の実をくたくたに煮込んだ椀の中身を啜つていると、笑いざめく少女たちの声がした。

椀の端を咥えて、ナギは眉をしかめた。

数人の少女が、木々をぬけて現れた。

その少女たちは、ナギとも、土の女衆とも違つていた。

背の半ばもある長い髪。白い長衣をまとい、肌は白く滑らかだ。

その中で、ひときわ背の高い少女が、田代とくしゃがみこんでいたナギを見つけた。

ああ、嫌な奴が来たとナギはそっぽを向いたまま汁を啜つていた。

「ナギ、今日は何を持ってきたの」

少女は尊大に尋ねた。

その少女は何も持っていない。背後の少女たちが荷物を助け合つよう持つてゐる。

「あたしは明日持つてくれるんだ」

ふんと鼻で笑うと少女たちをあごで使いながらナギを見据える。少女たちは木の皮で編んだ籠を下ろした。籠には、布と紐が摘んである。女衆はその籠を受け取ると、あらかじめ用意してあつた別の籠を少女たちに渡す。

芋と、様々な木の実の入つた籠を少女たちは重そうに下げる。背の高い少女は何も持たない。何故なら、持つことができないからだ。

人差し指から中指まで長く伸びた爪のため、その手を握り締めることすらできないからだ。

だから、籠をつかむことなどできないのだ。

「明日は、明日で、何か食べるんだろう、今日食つ分はただ食いだねえ」

「一度に、一食分くらい取れるときもあるんだ」

「へえ、それはそれは」

「大体お前にそんなことが言えるのか、その布だって、編みあがるのにどれほどかかる、布を持つてこなければ、食い物をもらえないならお前はとつくに飢えて死んでいるだろう」

「ナギ、やめよ」

女氏の一人が二人の間に割つて入つた。

「オルハが悪いんだ」

自分で責めるのかと、ナギが食つて掛かる。しかしそれをさえぎつて、女衆は言葉を続ける。

「いい加減におし、一人とも、我等はお前たちの働きをそれぞれ認めていて。その上で与えるべきものを与えているのだ。二人ともおやめ、お前たちは、子供だ、どの里の子であろうとも、子供は養わねばならぬ、それが、土の女衆の努めぞ」

暗に半人前とほのめかされ、一人は同時に、目を陥しくさせた。

「いいからおやめ、二人とも里に帰りなさい」

オルハは悔しげに、背後にいる少女たちを引き連れて背を翻した。ナギは急いで、手の中の椀を空にして、あわててそれを返し、自分の場所へと帰ることにした。

ナギが帰る途中、ナギの後から起きてきた仲間とすれ違った。

彼らは一様に、ナギから目を逸らす。

ナギはすなどりびとではないから、ナギは船乗りだから。

誰もが、ナギによそよそしい。マツリが終わって去つていった人たちが、たつた昨日の事なのに、もう恋しいと思う。

じりじりと陽が照り始めた中、ナギは茫然と立ち尽くす。

祭りの終わったその後に③

ナギも、他の子供たちも、毎日船に乗るわけではない。浜や岩場で籠を片手に、採集に励む日もある。

ようやく背の立つくらいの深さで、海中に潜り貝を集め。ナギは背後の陸を眺めた。

まるで自分は海の女衆だと、そんなことを考へて、苦く笑う。この近辺で、こんな仕事をしている女はナギ一人だ。

サザエは、岩のところにいるのが美味しい。砂のところのサザエは不味い。

そう呟いて、水中深く潜った。

籠の中がある程度重くなつたら、濡れた体のまま他のすなごりびとのところに持つていった。

魚も骨を取り除いたら、しばらく海水につけた後、干し上げてしまつ。

あたりや蛤は、甕に入れて、海水の上澄みを満たした中で砂を吐かせてから殻をはずし、干しあげる。

ここ数日は天氣が悪いと判断され、魚も獲つたはしから捌いて干しあげる作業が続いている。

夏と秋の間に獲れるものは獲れるだけとつて、塩漬けにしたり干し上げて保存状態をよくし、冬に備えなければならない。

だから、夏と秋は忙しい、それが、少しだけ、ナギは救いだと思った。

ナギより年長の少年たちが、貝を殻からはずしている。

それより、さらに年長の少年が、ナギに籠を渡した。

その籠には、魚の中骨が大量に入っていた。

びしょ濡れだが、かまつものかと軽く両手で髪を絞り、籠を手に上に登つっていく。

すぐに、草刈る土の女衆を見つけ、籠を渡そうとした。

しかし、今手が離せないから、他のものに渡してくれと言われ、おじじと同じくらいに老いた女衆に籠を渡すことになった。

「濡れたままじゃないか」

そう言って、ナギの口に自分の籠に入っていた小さな木の実を放り込んでから女衆はナギをそつぬめた。

「早く乾かしな」

「どうせまた、海に入るからいこ」

ナギはそっぽを向いて答えた。

「髪が痛むぞ」

「別にいい」

嘆かわしいといわんばかりに、女衆はため息をつく。

女衆は常に、土にまみれ身を粉にして働いているが、それは、いつも昼間だけだ。

夜になれば髪をくしけずり、簪や櫛で身を飾り、丹でその顔を彩る。

それは、ナギの額に刻まれた文様とはまったく趣を異なる女の化粧。

昼とは異なる異形の顔。

そうした女達は、大人のすなどりびとや、山の男衆にしなだれかかり、かいがいしく世話を焼き、そしていつしか、闇の中に消える。

そんな女衆を、ナギはいつもどこか薄気味悪く思っていた。

「あたしは船乗りになるから、おんなじじゃないもん」

ナギがそういうえば、女は虚を衝かれた顔で、しばらくぽかんと、ナギの顔を見ていたが、苦笑して、ほんぽんと、ナギの頭をたたいた。「どこの女でも同じ、海だらうが織だらうが土だらうが、女のすることに変わりなんぞない

「何だ、それは」

「子供にやわからん、わからんでいい。そのつち、わかるからな」

山の男衆は常に来るわけではない。はるか向いの山を越えてやつてくる、鹿やウサギの死骸を持つて。

それらは、皮をはぎ、肉を干し、骨を煮立て芋や木の実を煮る。いつもと同じ仕事だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5779y/>

ナギ

2011年11月20日16時42分発行